

平成29年度 学校評価

[各校の重点取組について]

- 1 学校教育目標、「学びあい、伝えあい、育ち合う、心豊かなたくましい子どもの育成」をめざして、「知をみがく」「生活をただす」「心を育てる」「体をきたえる」の4つの柱で教育活動を推進する。
- 2 「学校・保護者・地域がつながり、ともに歩む学校」をめざして、明るくいいきと活力に満ちた学校、特色ある学校、美しく清潔な学校、地域社会に信頼される学校づくりに取り組む。

学校教育に関する重点取組

| | | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
|--|--|----------|----------|
| 1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力を身につけさせる (1) 授業改善の取組を促進するとともに家庭との連携により、学力向上を推進する (2) 特別支援教育の取組を充実させ、自立や社会参加に向けた主体性を育成する | | 3.0 | 2.5 |
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 朝の読書タイムや昼のチャレンジタイムを継続して実施できた。 担任と指導補助員が連携し、週2回の放課後がんばり学習を実施、同室複数による指導で基礎学力の向上を図っている。参加率は全児童の82.7%、参加児童の出席率は5～2月で月別89.3～97.4%となった。全国学力・学習状況調査では、算数Aにおいて、正答数0～5問の割合が0%となり、底上げに成果が出ている。 児童同士の教え合いを多く取り入れた授業や具体物を使った指導等、児童の実態に応じた指導ができた。 毎月1回、生徒指導・人権・特別支援教育情報交換会で児童の実態の情報交換を行い、共通理解を図りながら組織的な支援を行うことができた。 特別支援コーディネーターを中心に、教育支援員や特別支援ボランティアを活用して、特別な支援を要する児童の指導に取り組むことができた。 | <ul style="list-style-type: none"> がんばり学習の内容を充実させ、引き続き、基礎基本の定着、学力の向上をめざす。 家庭学習の習慣がなかなか身につかないため、学校だより等で家庭の協力を依頼する。 計画的な参観授業、行事等を実施することで、保護者が参加しやすい状況を整え、保護者に学校への関心を持ってもらう。 理科学習の充実を図り、ノート指導の徹底を継続して行い、書く力やまとめる力を身につけさせる。 | | |
| 2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る (1) 道徳性育成の取組を促進し、思いやりに満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (2) 基本的生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (3) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成する | | 3.2 | 3.0 |
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> Smile! (とびっきりの笑顔)を合い言葉に、教育活動に取り組む。合い言葉が校内に広がり、意識化が進んだ。 朝のあいさつ運動や学校朝会を活用して心を豊かにする指導を進めた。 全学年で取り組む道徳の授業では、命の尊さ、安心安全、他者への思いやり等の指導を継続して行った。 道徳教育や学級づくり、縦割り班活動を中心にした特別活動を通して、自尊感情の高揚に努めることができた。 繰り返し徹底して指導し、基本的生活習慣の定着に取り組めた。 月1回、生徒指導・人権・特別支援教育情報交換会を持ち、児童の実態について共通理解を図りながら、いじめ、問題行動等の早期発見、早期対応、未然防止に努めた。養護担当やスクールカウンセラーとの相談体制も整っている。 将来に対する夢や希望が持てるよう、適切な職業観を育むため、3学期には公民館の事業を活用して、様々な職種の方とふれあうワークショップが実施できた。 | <ul style="list-style-type: none"> 人権週間では、道徳(人権)授業の公開を通して、児童だけでなく、教職員の人権意識や保護者の道徳性の向上に取り組む。 縦割り班活動を充実させる。なかよし活動やなかよし遠足を通して、高学年児童に自己存在感や自己有用感が持てるようにする。 基本的生活習慣が確立できるよう、引き続き、保護者への協力依頼を行う。 教職員全体で共通理解を図りながら、児童を指導し、保護者への連絡や連携を密に取るように努める。 | | |

| 3 食育や体育を充実させ、健康な体づくりに取り組む | | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
|---|--|---|----------|
| | | (1) 食育を通して生活改善の取組を促進し、望ましい生活習慣を育成する (2) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る | 2.9 |
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 望ましい生活習慣のため、給食では残食が少なくなるように取り組めた。 家庭科の学習を充実させ、よりよい衣・食・住について考えさせることができた。 自分の健康状態に関心を持たせ、体調管理が自分でできるように指導した。 給食委員会による献立放送を継続して行い、食について興味を持たせ、大切さを意識させることができた。 誕生日には給食のお代わり券を発行し、給食を楽しめるようにするとともに、自尊感情の高揚につなげることができた。 給食試食会が全学年で実施できた。学年別参加人数の合計が94人、全児童数比67.6%、学年別では50.0～86.9%となり、大変盛況であった。 全学級、健康教育についての参観授業を実施した。 特別活動や行事の中に集団活動を多く取り入れ、仲間とともに身体を動かす楽しさを体感させ、体力向上を図った。 尼っ子ジャンプチャレンジランキング(長縄とび)には全学年、ラジオ体操コンクールには、体育委員会と4年生が参加できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ほぼ毎日、残食ゼロの学級が半数あるが、さらに広げていく。 給食お代わり券が定着し、自分の誕生日を楽しみできたので、食育とからめた次の楽しみを作っていく。 縦割りなかよし活動や学級活動では、体を動かす活動の計画ができたが、子どもの主体性を伸ばす工夫を加えていく。 尼っ子ジャンプチャレンジランキングには全クラス参加し、はじめは上位にランクインできていたが、少しずつランクが落ちてきたため、もっと盛り上げるための工夫が必要である。 | | |

| 4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る | | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
|---|--|---|----------|
| | | (1) 安全教育の取組を促進し、登下校及び学校園内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る | 3.4 |
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> PTAや支援ボランティアの見守りにより、登下校時の事故はなかった。 校内安全については、安全管理員のパトロール、電子ロック等で安全確保に取り組んでいる。 月1回、教職員による安全点検を実施できた。 防災教育についての参観授業と引き渡し訓練を同日に実施し、児童だけではなく、保護者についても防災意識の向上を図ることができた。 「自分の命は自分で守る」という意識を持たせるとともに、災害発生時にどのように行動すべきかを機会あるごとに指導してきた。 定期的に校外児童会と集団下校を実施し、危機管理能力の向上を図ることができた。 | <ul style="list-style-type: none"> 徹底して安心安全な環境作りに取り組んでいく。 今年度は校区内にある反社会組織の動きが活発化したため、時刻を決めて、教職員引率による一斉下校をするなど、下校時の安全確保に努めた。このとき、保護者へは一斉メール配信による緊急連絡を行うとともに、警察や市教委等、関係機関との連携を図った。今後も情報収集と情報共有に努め、安全で迅速な対応をしていく。また、登校時の安全確認についても、引き続き行う。 「おはしもち」が意識せずともできるよう指導を続ける。 いろいろなケースを想定した訓練を実施していく。 各方面との連携が今後も必要である。 | | |

| 5 家庭・地域・学校の連携を深め、信頼され、活力に満ちた学校園づくりに取り組む | | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
|--|--|--|----------|
| | | (1) 教職員の資質向上の取組を促進し、学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 地域の教育力を活用した取組を促進し、地域とともにある学校づくりを推進する | 3.4 |
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | | |
| <ul style="list-style-type: none"> 教職員の「報告・連絡・相談」体制を徹底している。 情報の伝達、共有に努め、児童の状況については随時報告し合い、同一方向にむかって指導ができるようにしている。生徒指導・人権・特別支援教育情報交換会を月1回実施できた。 教職員が積極的に研修に取り組める体制づくりに努めている。 園田カーニバルや敬老会等、地域開催の行事に児童が参加したり、夏祭りや地域運動会など地域行事と学校行事をうまく関連させながら、地域と学校の一体感が高まるよう取り組んだ。 地域には、オープンスクールや学校行事等の案内を行い、参加を呼びかけた。 地域の図書ボランティアによる月1回の読み聞かせを行うことができた。 学校ホームページを月2回以上更新するという目標に向け、積極的な情報発信に努めることができた。月平均3.7回達成。 全児童欠席ゼロの日を増やす。(目標20日) 保護者、地域向けに、尼崎総合医療センターから小児科の医師を招聘し、「子育て講演会」を実施した。発達特性、発達障害について正しい理解ができる機会となった。参加保護者24人、全家庭数比22.4%(全児童数比36人25.9%)、保育所、地域等は9人、参加者合計33人。実施までに、学校通信2回、手紙2回、一斉メール配信1回、ホームページ1回、保護者へは合計6回お知らせした。 | <ul style="list-style-type: none"> 学校評議員会や学校評価を活用する。教職員はPDCAサイクルに基づいた学級経営を展開する。若い教職員が多いため、ベテラン教師によるOJTで実践的指導力を身につけるようにしてきたが、単学級という壁は大きい。 校内研修の充実を図りながら、校外での研修を積極的に活用できたが、本校へ還元する十分な時間確保が難しい。 学校地域協働本部設置に向けて、地域コーディネーターの人選を図る。 全児童欠席ゼロ、現在も5日。学校を休まず元気に登校できるよう、個々の児童の特性と家庭環境に応じた対応に今後も努める。 | | |

| | | |
|--|------------|------------|
| 教育目標 | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
| | 3.1 | 2.5 |
| (1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実 | | |

| | | |
|---|--|--|
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・教育目標達成に向けた各学年・学級目標、年間行事・教育計画を立案し、実施することができた。教育目標の具現化…4つの柱で取り組んだ。 ＜知をみがく＞ 朝読書やチャレンジタイムの継続的な指導で基礎学力を定着させる。がんばり学習の効果的な運用と家庭学習の習慣化をめざす。 ＜生活をただす＞ 基本的な生活習慣の確立をめざす。家庭と連携し、生活指導を徹底する。児童会を活用した効果的な生活指導に取り組む。 ＜心を育てる＞ 道徳(人権)学習を継続して行う。小規模校の特性を活かした、なかよし活動を実施する。低中高同一グループ内で仲良く学び、意欲的に活動している。 ＜体をきたえる＞ 尻っ子ジャンプチャレンジランキング(長縄とび)やラジオ体操コンクールに挑戦する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・授業改善に努め、児童の学習意欲を高めて学力向上に取り組めたが、十分な結果には至らなかった。児童にはもう少し課題意識を持たせたり、問題解決能力を身につけさせたりしていく工夫が必要である。 ・家庭への啓発、支援、相談を積極的に行い、基本的な生活習慣の確立と家庭での学習習慣の確立に今後も努めていく必要がある。 ・PDCAサイクルに基づき、教育目標達成に向けた全教職員での取り組みを継続していく。 | |

| | | |
|--|------------|------------|
| 研究テーマ | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
| | 3.6 | 3.5 |
| (1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実 | | |

| | | |
|---|---|--|
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・特色ある学校づくりの一環として、外国語活動に取り組めた。 ・「外国語を通じてコミュニケーションを楽しむ子どもの育成」を目指して、研究主任、外国語活動担当教員を中心に教職員が一丸となって取り組んだ。 ・一人一授業の実施。講師(関西大学外国語学部今井裕之教授)を招聘し、指導案作成時から指導を仰いだり、積極的に先進校視察に出かけ、授業力の向上を目指すことができた。 ・全体研究会はワークショップ型KJ法を進めることで、全員参加の活発な討議ができた。視点を絞った話し合いにもなり、成果と課題が視覚化できた。 ・授業公開は市内全小中学校及び市教委に案内し、多方面からの意見を取り入れることで、小規模校の弱点を補うことができた。研究授業の6本だけではなく、オープンスクール時における外国語活動授業まで授業公開し、1年間で合計16本の公開授業が実施できた。 | <ul style="list-style-type: none"> ・研究を始めて9年目、研究主任のリーダーシップのもと、本校が1年目の教職員についても、本校が進める外国語(英語)活動授業ができるよう、授業支援や助言、校内研修等をさらに充実させる。 ・ClassRoomEnglishを積極的に取り入れたり、朝の放送に英語を取り入れたり、英語の絵本を読み聞かせしたりすることに加え、さらに教材や掲示物等の環境整備を進めるなど、学校生活の中に外国語をさらに身近なものにしていく工夫をする。 ・新教育課程の移行期を迎えるため、新教材の使用や評価面を考え、カリキュラムの再編成が必要である。 ・外国語に苦手意識を持つ児童への手立てを授業研究の中でも考えていく必要がある。 | |

| | | |
|--|----------|----------|
| | 評価Ⅰ(教職員) | 評価Ⅱ(校園長) |
| | | |

| | | |
|----------------|---------------|--|
| 取組とその成果 | 課題と改善策 | |
| | | |